

小学校国語科における「新聞」を表現活動に生かす試み

杉川千草

一 はじめに

小学校では本年度から新しい学習指導要領が全面实施となり、「言語活動の充実」が広くうたわれている。具体的には、何をどのようにすればよいのだろうか。ここでは、これまでに行った実践の中から「新聞」を表現活動に生かす試みを取り上げ、改めて「言語活動の充実」という観点から考察する。そして、言語活動としてのよさや改善点、方向性を探っていきたい。

二 新しい学習指導要領における言語活動の充実

言語活動の充実を図るために、小学校国語科の学習指導要領では、「新聞」を取り上げた言語活動例が次のように挙げられている。

○ 第三・四学年「書くこと」

「(2)イ 疑問に思ったことを調べて、報告する文章を書いたり、学級新聞などに表したりすること。」

○ 第五・六学年「読むこと」

「(2)ウ 編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと。」

このような記述に基づいて、平成二十三年度版教科書にも、第三・四学年では主に「新聞づくり」にかかわる教材、第五・六学年では主に「新聞の読み方」にかかわる教材が多く取り上げられている。例えば、次のとおりである。

「見てきたことを新聞にまとめよう」(学校図書三上)

「みんなで新聞を作ろう」(東京書籍四下)

「新聞を作ろう」(光村図書四上)

「学級新聞を作ろう」(教育出版四上)

「新聞でニュースを伝える」(三省堂四)

「新聞を作ろう」(教育出版五上)

「グループ新聞」(三省堂五)

「新聞を読もう」(光村図書五)

「新聞記事を読み比べよう」(東京書籍五上)

「新聞の読み方を考える」(学校図書五下)

「新聞の投書を読み比べよう」(東京書籍六上)

三 「新聞」を表現活動に生かす小学校国語科授業実践

これから報告する二つの実践は、どちらも「新聞」の表現方法を読み取り、子ども自身の表現活動に生かそうとしたものである。

(1)「広告をつくる」(第四学年)(平成十五・十八年度実施)

①単元について

本単元は、自分たちの伝えたいことを、言葉と絵や写真を用いた広告に表現する学習である。広告の言葉は、主にキャッチコピー、ポデューコピーから構成されており、吟味を重ねた短い言葉が用いられている。また、絵や写真とコピーとの組み合わせやレイアウトにも、見る人を引きつけるためのさまざまな工夫がなされている。そのため、相手を意識して伝える力を育てたり身の回りの言語表現に目を向けさせたりするためにふさわしい学習であると考えられる。ここでは、自分たちの伝えたいことを広告に表現する活動とおして、相手を意識した的確で効果的な表現を用いようとする意欲を持たせるとともに、身の回りの言葉に対する感覚を磨いていくことをねらいとした。

指導にあたっては、次の二点を意識して単元を構成した。

○身の回りの言葉に対する感覚を磨く

普段何気なく接している身の回りの言葉を意識化させるために、身の回りの言葉との印象的な出会いの場をつくる。また、新聞広告

の他、駅の構内や学校内に掲示されていたさまざまな広告をよく観察させることによって、広告にはどんなことがあるように表現されているのかを見つけさせ、その表現方法を整理させる。これらの資料を教師から提示するだけでなく、子どもたち自身にもいろいろな広告を集めさせ、身の回りで用いられている言葉に対する感覚を磨き、日常生活の中の言葉に子どもたちの目をひらくきっかけとする。

○表現の目的意識や必要感を持つ

広告制作にあたっては、題材をできるだけ身近な生活の中から選取させることで、だれに対してどんなことを表現したいのか目的意識をしっかりと持たせてから、必要感のある学習を進めさせるようにする。その際、情報の送り手としての立場と受け手としての立場とを相互に経験させることで、日常生活の中の言葉を見つめ直す姿勢を持たせる。そして、国語の授業と日常生活の中の言葉の学びとをつなぐために、学んだことを生活の場を生かすことのできるような単元構成をする。また、完成した広告を実際に掲示することで、自分たちの学んだことが生活にどう生かされたかを確かめさせ、学習の達成感を味わわせるようにする。

②目標

○自分たちの伝えたいことが相手にはつきり伝わるように、見る人の興味を引く表現の広告をつくることができるようにする。

○広告の受け止め方や活用の仕方、見方について、自分の考えを深めることができるようにする。

○いろいろな広告にふれたり友達と交流したりすることによつ

て、表現のよさに気付いたりより効果的な表現を考えたりすることができるようになる。

③計画（全十二時間）

第一次 広告ウォッチング ……二時間

第二次 制作 ……八時間

第三次 制作発表会 ……一時間

第四次 振り返りとまとめ ……一時間

この単元で、新聞（新聞広告）を扱ったのは、第一次の「広告ウォッチング」のところである。広告のコピーやレイアウトなど、見る人を引き付ける表現の工夫を見つけさせるために位置付けた。



教科書（学校図書四下）では、「グラツときたら 身の安全 すばやい消火 火の始末」という、地震の際の火災予防を呼びかける公共広告が掲載されており、言葉遣い、文字の大きさや色の使い方、写真や絵の使い方の工夫、この広告で伝えたいことなど、まず、この公共広告の特徴について話し合うようになっていた。そして、自分たちの住んでいる県や地域の観光地や特産物、学校や地域で取り組んでいる活動などを他の地域の人に知らせるコマーション広告を、子どもたち自身がつくるという流れであった。

④授業の概要

〈広告ウォッチング〉

授業に先だって、コピーやレイアウトなどに工夫が見られ、子どもたちにも内容が理解しやすいと思われる新聞広告や学校や駅構内に掲示されていたポスターを、教師の方で集めておいた。そして最初の時間は、「ようこそ広告ランドへ」と称して、授業場所の壁面に新聞広告やポスターなどを掲示し、広告にはどんなことがどのように表現されているかを見つけさせるようにした。

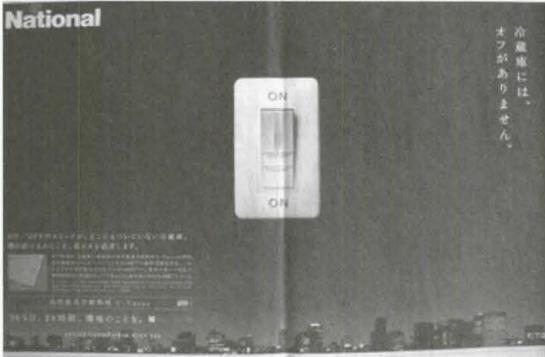
次の時間は、前時に学習した広告表現の工夫について整理した後、教科書で広告制作の流れを確認し、今後の学習の大まかな計画を立てるようにした。またこの単元は、十二月の終わりからの実践だったので、冬休み中に子ども自身で「広告ウォッチング」を行うように促した。そして、見つけた広告のキャッチコピーと広告が表現していること、文字や言葉、絵や写真、レイアウトなどで工夫しであると思ったことや感想などを、プリントに記録させるようにした。冬休み明けには、自分が興味を持った新聞広告を切り抜いて

持つてこさせ、みんなに紹介させるようにした。

「広告ウォッチング」で取り上げた広告例の一部は、次のとおりである。

「ニッポンのうまさを見せろ。」

世界柔道のテレビ番組の広告である。キャッチコピーの「ニッポンのうまさ」という言葉が、柔道とおむすびの両方にかけてある。また、おむすびに巻いてあるのりの黒帯や背景の畳など、細かいところまでよく考えられている広告である。



「冷蔵庫には、オフがありません。」

冷蔵庫の省エネをアピールしている広告であるが、よく見ると中央のスイッチが上下ともONとONで、スイッチが冷蔵庫になっているというしかけがある。

〈制作〉

制作にあたっては、だれに対してどんなことを伝える広告をつくりたいかを出し合わせた。その結果、「動物愛護」などの公共広告、学校の特徴や三原市の名物をアピールする広告などのグループに分かれることになった。そこで、次の時間は、コピーのアイデアを出し合い、絵や写真、レイアウトを考えて広告原稿をつくらせるようにした。

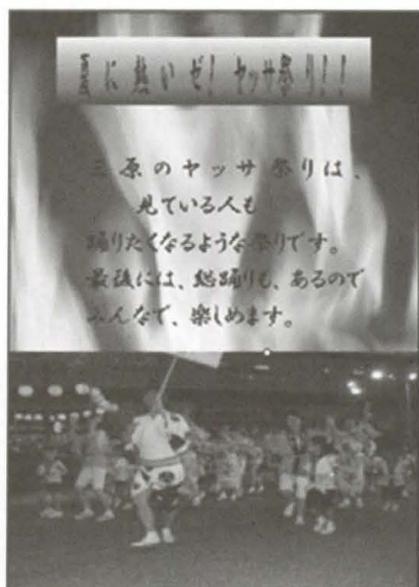
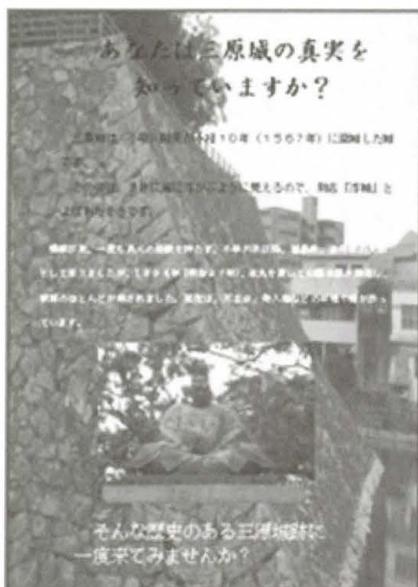
また、広告交流会を行うことで、絵や写真とコピーの内容やその組み合わせをお互いに吟味させた。

その後、マルチメディアの時間も使って、コンピュータでグループの広告を仕上げさせた。制作発表会では、キャッチコピーやボディコピー、写真、色やレイアウトなどを評価させ、お互いのグループの広告表現のよさを学んだり表現方法の工夫を共有化したりするとともに、実際に掲示することによって、自分たちのつくった広告が見る人にどのように受けとめられるか、学習の成果を感じさせるようにした。

実際に子どもたちが作った広告では、

「夏に熱いゼーヤッサ祭りー！」

この広告は、地域の人にヤッサ祭りのよさを伝えようとしたものである。三原では、四百年以上前からヤッサ祭りが行われており、



阿波踊りのように連を作って街中を練り歩く。本校も毎年学校単位で参加しているので、この広告には、ヤッサ祭りに参加した時の実際の写真を使っている。

「あなたは三原城の真実を知っていますか?」

この広告は、三原を訪れたことのない人たちに三原城のひみつを伝えようとしたものである。三原は毛利元就の三男の小早川隆景の城下町として栄えた町で、その城跡が学校のすぐ近くに残っている。背景の写真は、子どもたち自身がデジタルカメラで撮影した。

単元の最後では、次のような振り返りが見られた。

・初めてやったときは「おもしろそう」と思っていたけど、やっていくたびにレイアウトやキャッチピーパーやポデコピーがとんでもむずかしくて大変でした。最後にできた広告は、みんなとてもいいなあと思います。

・実際に作ってみて、いろいろとひねってある広告は私たちが作ってみたのよりすごく工夫したりしてよかったです。広告一枚にこんな時間がかかるとは思ってもみませんでした。広告を作る大変さを学習したし、ここまでしても伝えたいことがあるんだと思います。

このような振り返りをおして、子どもたちが広告ウォッチングの学習を生かして、広告づくりに取り組んだことがうかがえた。

広告には、カラフルな色が使われていることや、興味を引く絵や写真があることが親しみやすかったようで、子どもたちは、広告に用いられている絵や写真、レイアウトや色遣いなど、表現方法の細かいところまで観察することができていた。

また、子どもたち自身にもいろいろな新聞広告を集めさせること
によって、通学途中の駅の構内に掲示してあるポスターを注意深く
観察するなど、身の回りで用いられている表現方法に対する感覚を
磨き、日常生活の中の表現方法に子どもたちの目を向けさせるきつ
かけとすることができた。

しかし、キャッチコピーについては、子ども自身の力では意味
を理解することが難しい場合もあった。また制作にあたっては、
キャッチコピーの文言を十分に練るところまではなかなか至
らなかった。

(2) 「メディアを学ぶ」(第六学年) (平成十九年度実施)

① 単元について

本単元は、新聞記事やニュース番組を素材にして、メディア・リ
テラシーを育てようとする単元である。子どもたちは、日常的にテ
レビやインターネット、携帯電話などとおしてさまざまな情報に
接しており、それらの内容を十分に吟味しないままに受け取ってし
まっている状況である。ここでは、受信者と発信者の両方の立場を
体験させ、情報の向こうにいる発信者の思いを感じさせることによ
り、身の回りのさまざまな情報を正しく効果的に読み解き、自らの
情報発信に生かしていく力を育てることをねらいとして、次のよう
な単元構成にした。

○ メディアの違いによる表現方法の比較

同じ出来事を扱った新聞記事やニュース番組を比べさせ、発信者
の意図によってさまざまな表現方法や受け止め方があり、身の回り

の情報が加工されたものであることに気づかせるようにする。

○ 自らの情報の発信

新聞記事やニュース番組の比較で学んだことを生かして、学校行
事についての新聞記事をつくらせる。その際、お互いの新聞記事を
交流することによって、それぞれの表現方法や表現内容の工夫を見
つけるとともに、自分の意図が伝わるように言葉を吟味させる。ま
た、できあがった新聞記事を発信し、お互いの思いを共有させる。こ
ととおして、新たな他者とのつながりをつくり出していく。

② 目標

○ 相手の意図を考えながら情報を受け取り、自分自身の考えで情
報を判断することの大切さをとらえることができるようにする。

○ 新聞記事やニュース番組を調べ、それぞれの特徴を比較しなが
ら読み解くことができるようにする。

○ グループでお互いの新聞記事を交流し合うとともに、学んだこ
とを自分の新聞記事づくりに生かすことができるようにする。

③ 計画(全八時間)

第一次 新聞記事を読み解こう ……二時間

第二次 ニュース番組を読み解こう ……一時間

第三次 新聞記事とニュース番組を比べよう ……一時間

第四次 新聞記事にして伝えよう ……四時間

教科書(学校図書六下)では、「ニュースを読み解こう」という
単元名で、ニュース番組の分析のみだったが、本実践では新聞も読
み比べ、新聞作りも行うことにした。直接新聞を扱ったのは、第一
次・第三次の読み比べと第四次の新聞作りのところで、新聞記事を



朝日新聞広島版・佐賀版号外（平成 19 年 8 月 22 日付）

比較し、書き手の意図によって見出しや写真など記事内容の違いを読み取り、新聞記事の書き方を学んで新聞作りに生かすために位置付けた。

④ 授業の実際

〈新聞記事を読み解こう〉

- まず、甲子園決勝戦広陵対佐賀北のVTRを見せ、知っていることや感じたことなどを交流させた。その後、決勝戦の試合結果を報じる平成十九年八月二十二日付の朝日新聞広島版の号外と朝日新聞佐賀版の号外を比べさせたところ、次のような気付きが見られた。
 - ・佐賀版は「佐賀北優勝おめでとう」という気持ちは伝わってくる。
 - ・広島版は、広陵サイドから号外が作られている。
 - ・「準優勝残念だったね」という気持ちは伝わってくる。
 - ・写真も、佐賀版は決勝満塁本塁打だけれど、広島版は広陵がヒットを打っているところを載せている。
- その後、翌日の広島版と佐賀版の朝刊の一面と第一・第二社会面を提示し、それぞれの伝えたいことや表現方法の違いを各自で見つけ交流させたところ、次のような反応が見られた。
- ・佐賀版は佐賀北の記事がたくさん書いてある。
 - ・佐賀版は見出しに方言を取り入れて、共感を呼んでいる。
 - ・広島版では一面や第一社会面には佐賀北のことが書いてあるけれど、第二社会面には広陵のことが書いてある。
 - ・敗れた広陵を励ましていることが感じられる。
- 次に挙げる振り返りは、A児のワークシートの記述である。

新聞を読んで、読み手が読みたくなるように、佐賀なら佐賀北、広島なら広島というふうに取り上げているのも違うし、佐賀北の優勝についての表し方も違うなと思いました。ほくも新聞を書くときには、こういうことに気をつけたいです。(A児)

〈ニュース番組を読み解こう〉

次の時間は、決勝戦当日の「ニュースウォッチ9」(NHK)と「報道ステーション」(テレビ朝日)の映像を見比べさせた。そして、同じ出来事の記事ではあるが、伝えたいことに合わせてどんな工夫がなされているか、それぞれのニュース番組の構成を分析させた。

・初めに試合結果を言わずに視聴者に興味を持たせている。

・NHKは佐賀北の話題が中心。

・報道ステーションでは、決勝戦までの試合の様子、試合前や試合後の地元の様子、応援席の様子、インタビュアーなど、いろいろな角度から伝えている。

・「がばい旋風VS古豪」というネーミングで印象づけている。

・キャスターの会話や音楽で盛り上げている。

ニュースでもだれに見せるかによって伝え方が違って、NHKとテレビ朝日では時間が違うし内容も少し違うなと思いました。NHKは問題のストライクかボールかの判定が審判側から、テレビ朝日はピッチャー側からと違いました。(A児)

〈新聞記事とニュース番組を比べよう〉

新聞記事とニュース番組について読み解いてきたことを振り返り、それぞれの特徴について整理させた。

・新聞記事はいつでも好きなときに、自分の力で読むことができる。

・ニュース番組では、表情や声の調子で感情も伝えられる。

・映像があるのでわかりやすい。

・情報を速く伝えることができる。

その後、新聞記事もニュース番組も発信者の意図によって情報が加工されていることを確認し、情報の受信者としてどのようなことに気をつけなければならないか考えさせた。

新聞社やテレビ局によって違う内容なので、全てをうのみにしてはいけないし、いろいろな情報の中から自分に必要な正確な情報を採りなすかなと思いました。全てが真実というわけではないので、こういうことに気をつけていきたいです。(A児)

〈新聞記事にして伝えよう〉

これまでの情報の受信者としての学習を生かして、今度は発信者の立場から、六年生自身がさわやか班(縦割り班)の班長や副班長として活躍した自伸会(児童会)行事の「秋季大会」についての新聞記事を書かせることにした。

まず、秋季大会の様子をビデオで想起させた後、だれにどんなことを伝えたいかを決めさせた。そして、自分の伝えたいことに合わせて見出しを付ける、写真を二枚入れる、文字数を四百字程度にす

るなどの大まかな条件を決めた。また、事前に本校の行事が掲載された実際の新聞記事を紹介し、見出しの付け方や記事の書き方など基本的なことを確認させた。記事作りにあたっては、自分の伝えたいことに合わせて、当日の日記を読み返したり班のメンバーや自働会総務（役員）に、インタビューしたりしている子どももいた。

下書きができあがった段階で音読して交流させ、それぞれの表現方法や表現内容の工夫を見つたりアドバイスをしたりさせるようにした。A児の下書きに対しては、次のような感想やアドバイスが あった。

・とてもよかった。（T児から）

・すごくいい文だと思いました。体言止めなどが使ってあって工夫が目立ちました。（K児から）

・文の内容が少し違うと思う所もあったので、直したらいいと思います。でも、総務ががんばっていたということがすごく伝わってきたのでよかったと思う。（N児から）

自分で読んでみると、客観的になれてどこを直せばいいかわかった。グループの人たちの記事の良いところを学べた。ほとんどのグループはみんなままとめがいいなと思いました。他の人と自分の考えも違うと思いました。（A児）

その後、自分の伝えたいことがしっかり伝わるように、新聞記事の言葉を吟味させるとともに、見出しや写真とのつながりも考えながら清書させるようにした。六年生が直接リーダーとして活躍する最後の行事でもあったので、全員の新聞記事が完成した段階で掲



A児の作った新聞

し、それぞれの表現方法や表現内容のよさをお互いの思いを共有させるようにした。

このように、子どもたちは、情報の送り手としての立場と受け手としての立場とを相互に経験することで、相手意識の違いによって表現方法が異なってくるということを実感できていた。また、新聞作りにあたっては、具体的なモデルを示したことで、型通りの記事ではあるが、お互いにアドバイスをし合いながら、新聞から学んだ表現方法を積極的に取り入れようとする姿が見られた。

四 おわりに

本稿で示した実践では、「新聞」の表現方法を子ども自身の表現活動に生かすために、広告の表現方法に着目させたり新聞記事の読み比べをさせたりした。表現方法の読み取りと表現活動を別々に取り上げるのではなく、一つの単元の中で発展的に構成することによって、学習の効果をあげることができたのではないかと考える。ただし、「言語活動の充実」という観点から見ると、果たして単元を貫く言語活動になっていたのか、指導目標に合致したものでなかったのかなど、改善すべき点も見られた。

例えば、単元作りの段階で、教師の側は「最終的に表現活動につながる」という構想を持っていたが、子どもにとっては、学習の過程において発展する展開となった。単元の早い段階で、子どもたち自身に「この言語活動はこんな学習につながる」という明確な見通しを持たせることが必要であった。そうしていれば、それぞれの活

動に目的意識をしつかりと持たせることができ、「新聞」の表現方法の読み取りは、一層主体的なものとなり、子ども自身が表現活動に生かすことができたであろう。

そのためには、教師自身の言語活動についてのとらえを明らかにしたうえで、言語活動の充実を図るための手立てを単元の中にきちんと位置付ける必要があると感じた。言語活動の充実を図るための単元をどのように構成していけばよいのかを、今後の課題とした。

尚、本稿は、第十二回NIE全国大会岡山大会（平成十九年七月二十七日）における実践発表「社会にひらくNIEの学習開発〜国語科における実践を通して〜」や広島大学学部・附属共同研究機構編「学部・附属学校共同研究紀要第三十六号」pp.45-44「国語科総合単元づくりのための教材開発と指導法に関する基礎的研究（Ⅳ）―言葉をとおしてかわり合い、他者につながる言葉をつくり出す国語科の学習―」（山元隆春・佐々木勇・杉川千草 他三名）で提案した実践を再検討し、加筆したものである。

（広島大学附属三原小学校）